

巫者の呼称に関する一考察——ワカとイタコを中心に——

村上 晶

全国各地に見いだすことができる巫者には、それぞれの地域で固有の呼び名が与えられている。本発表では最初に、巫者の呼称が地域社会とのかかわりの中で、雄弁にその巫者の来歴と職能を語るものであることを確認した。つまり、呼称とは地域におけるその特定の巫者に対する様々な評判を結晶化したものであり、「イタコ」や「カミサマ」といった呼称が与えられるということは、その個人の一連の修行過程や職能が「評判」として人々に認められたということを意味する。呼称は、地域社会が与える承認の証であり、巫者としての正当性を担保する重要な要素であるといえる。また、巫者自身も、そうした呼称を与えられることによって、巫者としてのアイデンティティを保持・強化していくことができると考えられる。

しかし、巫者伝統の消失が叫ばれる現代においては、そうした呼称と巫者、そして地域社会との関わりは大きく変化している。

まず、典型的な巫俗の消失の事例として、茨城県北部でワカと呼ばれていた巫者の事例があげられる。同地域では、昭和三〇年代にワカの活動が見られなくなり、ワカという呼称はワカと呼ばれていた人々とともに過去のものとなった。このように、ある呼称が、その担い手と共に消え去っていくのは常であるように思われる。しかし、青森県内のイタコの場合、近年、呼称と巫者が非常に特異な関係で結ばれるようになってきている。その知名度の高さから、ニーズが衰えないイタコの口寄せで

あるが、イタコそのものの数は激減しており、師資相承のイタコの習俗は消失間近であるといっても過言ではない。イタコ不足を補うために、従来口寄せを生業としてこなかったカミサマ系の巫者がイタコとして口寄せを行っているという事例も数多く見られる。

たとえば、典型的なカミサマ系巫者でありながら、イタコとして活躍しているK氏の場合、イタコという名は、イタコツアーを企画する大手旅行会社から与えられたものであり、彼女自身が積極的にイタコを名乗ることはない。彼女にとって、呼称とは他地域の人びとへのわかりやすさを優先した、戦略的で形式的なものにすぎない。

他方で、積極的に「イタコ」を名乗り、発信していくことによって自らの巫者としての正当性を証明していこうという事例も見られる。男性のイタコであるN氏は、テレビ出演や、大学教授による調査などといったより「世俗的」な権威を、自らが真のイタコであることの根拠として用いる。こうした事例からは、現代社会で「イタコ」で在り続けるためには、地域の評判や巫俗の伝承のみでは正当性の根拠としては不十分であり、世俗的な権威も導入していく必要が出てきているという事態を垣間見る事が出来る。

師資相承のイタコの習俗とそれに評価を下す地域の人びとの「構え」が消失していつているのに反して、現代では情報化社会の中でイタコという語のみが生き残り広まっている。その中で、地域の文脈を離れ、意味が希薄化した「イタコ」という名を名乗ることは容易くなってきたっており、現在では従来のイタコ

の理念型から大きく外れる者であっても、また、修行や入巫儀礼を経ない者であっても、イタコを名乗ることが可能である。

(事実、インターネット上では「イタコの電話占い」等のサイトが乱立している。)しかし、その正当性を裏付ける地域の評判といった内実が伴っていない「イタコ」を名乗り続けるためには、自らの存在を、別の何らかの手段で正当化し続けなければならぬという事態が生じている。急速に変化する現代社会の中で、巫者はどのようにして社会と関係を取り結んでいくのか、呼称の問題を通してその一端を明らかにした。

大衆文化としての「イタコ」とオカルトブーム

大道 晴香

イタコは青森県から秋田県・岩手県に分布する民間巫者であり、特定の地域に根付く民俗文化であるにも拘らず、その存在は現在、テレビや雑誌を通じて全国的に広く認知される状況にある。しかしながら、民俗文化としてのイタコと、マス・メディアによって形成された大衆文化としての「イタコ」との間に隔たりが存在しており、後者は前者の有り様にも影響を及ぼす点で、民俗文化領域の研究を行うにあたっても決して無視することの出来ない事象となっている。

論者はこれまで、大衆文化としての「イタコ」の具体相を、活字メディア(新聞、雑誌)より明らかにしてきた。現在までに得られた結果を概観すれば、「イタコ」が活字メディアに登場し始めたのは一九五〇年代のことであり、「恐山」という場を通じて「恐山のイタコ」に注目が集まった結果、六〇年代の

時点で「イタコ」は既に一定の知名度を獲得していた。そして、こうした「イタコ」の知名度をさらに高めることとなったのが、続く一九七〇年代に生じたオカルトブームである。オカルトブームは「イタコ」の定着を促がすと同時に、従来のイメージを大きく転換するターニングポイントであったとみられる。

以上のような問題意識のもと、本発表ではオカルトブーム影響下の言説として中岡俊哉『死霊を見た! 最後のミステリー・ゾーン「恐山」の神秘』(二見書房、一九七七年)を取り上げ、本書における「イタコ」の様相とブーム以前に出版された一般書におけるそれとの比較を通じて、オカルトブームによる「イタコ」の再表象について考察を行った。

比較の結果として明らかとなったのは、オカルトブーム前後の「イタコ」における「担い手」の違いであり、端的に述べれば、そこには「他者」から「我々」へという変化が生じていた。まず、オカルトブーム以前において「イタコ」の「担い手(利用主体)」として想定されていたのは、「東北の善良な主婦たち」や「素朴な参詣人」といった語で表される「他者」であり、決して「語り手」およびその視点を共有する「読み手」によって形成される「我々(大衆)」ではなかった。「我々」に与えられた立場とは、あくまで「イタコ」およびその「担い手」を「見る(観る)」立場であり、「口寄せをしてもらう」立場ではなかったのである。つまり、オカルトブーム以前の「イタコ」とは、『他者』の文化・風習であったということが出来るだろう。

これに対して、オカルトブームの影響下で書かれた中岡の『死霊を見た!』の場合には、言説における「語り手」自身が積